

令和5年度 琢成小学校の研究内容のイメージ

R5.4.7 学校研究全体会

文責：佐和

「何を研究したいか」 「どのように研究したいか」 「共に踏み出す一歩」 とは何か

教師の世代交代が進むと同時に、学校内における教師の世代間のバランスが変化し、教育に関わる様々な経験や知見をどのように継承していくかが課題となり、また、子供たちを取り巻く環境の変化により学校が抱える課題も複雑化・困難化する中で、これまでどおり学校の工夫だけにその実現を委ねることは困難になってきている。

(小学校学習指導要領解説 総則 第1章 総説より)

前年度までの学校研究(学びに関わりながら、考えや思いを深めることができる子どもの育成)や、庄内教育事務所からのR5学校教育の重点(夢を広げ 明日を拓く 庄内の教育)より

- 「主体的・対話的で深い学び」「協働的な学び」は、
授業改善の視点
- 学びを深める鍵として「見方・考え方」を働かせることが重要
☆ そもそも「見方・考え方」って?
「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考しているのか」というその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方のこと
- 児童や生徒が生活や社会において「見方・考え方」を働かせることができるようにすることにこそ、教師の専門性が発揮される。

一人ひとりをのばす「担任力」を育てるため
子どものため自分たちの授業力向上のため
琢成らしい探究的な学習

「何を研究したいか」

- ・主体的に学習に臨み、協働的に学ぶことで深い学びを生む子どもの姿
- ・その学習の過程で全員が見方・考え方を働かせる研究

「どのように研究したいか」

- ・研究授業時だけでなく、空きコマなどいつでもフラットなお邪魔できる環境づくり。
⇒常に自己研鑽
- ・自分がやってみたいと思える授業でなければ、誰もやってみたくはない
⇒先生方の得意を発揮、教材の魅力、学習展開の魅力、若手からも学びたい

「共に踏み出す一歩」とは

- ・今後、琢成小も世代間バランスが変化するのは必至
- ・30代でミドルリーダー的役割が求められる
- ・20代で授業力を身に付けなければ厳しい
⇒「教材化力」を高める
⇒子どもを見る目を鍛える
⇒「子どもとの関係」を大切にする

研究を通して授業力が高まる

新研究素案

令和5年4月7日
文責：佐和

成果と課題から

『学び関わりながら、考えや思いを深めることができる子どもの育成』の成果

- ・「グループ活動」「転びやすい授業」「見通すよりもまず思考・活動の時間の確保」など、子ども同士がつながることに主軸をおき、主題に迫ることができた。
- ・「主体的・対話的で深い学び」の方向性が見えてきた。
- ・他者とつながって学ぶことの楽しさに気付いた子どもたちは、主体性、理解力、表現力の伸びが見られた。
- ・授業外でもこのような姿が見られるようになってきた。

R4年度年間反省アンケートより

『学び関わりながら、考えや思いを深めることができる子どもの育成』の課題

- ・「学ぶ」「関わる」などのイメージの共有が必要。
- ・自分の考えに自信が持てない、伝える技能が未熟な子どももまだまだいるので、指導と主体性の両輪で考えていく必要がある。

R4年度年間反省アンケートより

学習指導要領から

昨期の研究において、私たちが目指した子どもの姿は、「学び関わりながら、考えや思いを深めることができる姿」である。協働的な学びの視点を取り入れ、子どもに任せてみる、先生も一緒に転んでみる、といったチャレンジをした結果、主題に迫る子どもの姿が多く見られた。しかし、どの子どもも考えや思いを深めるという「深い学び」ができるまでに育てることができたかと言われれば、まだまだそのレベルに到達したとは言えない。

本校の子どもの実態として、失敗したくない、間違いたくないと完璧を求めるあまり、自分の考えを表現することを避けるという実態がある。そういった強さやたくましが欠けているとともに、一人で選択・判断する力が欠けているという実態もある。その課題に対して、研究面からもアプローチしていく。

★昨期の研究では、「協働的な学び」の視点で教材化を図ることで、子ども同士がつながり、自らねらいに迫っていく力を育成することにつながった。

★次期研究では、その主体性をさらに高め、深い学びに向かうために、**見方・考え方**を子どもが働かせることができる学習を目指す。

「主体的・対話的で深い学び」「協働的な学び」は授業改善の視点。それに関わる研究を通して、日々の授業改善にも生かせる研究としたい。

★総則では

- 「生きる力」をより具体化し、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力を、
- ア「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」
- イ「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」
- ウ「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」
- 三つの柱に整理している。

★社会に開かれた教育課程の実現

よりよい学校教育をとおりよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有することが求められる。そのため、それぞれの学校において、必要な学習内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを教育課程において明確にしなが、社会との連携及び協働によりその実現を図っていく。

★昨期の研究から次期の研究へ

子どもが主役、子どもが関わり合いながら進む授業のあり方を考えた昨期の研究

その子ども主体の授業を継続し、見方・考え方を子どもが働かせ、深い学びへと向かう学習

- 見方・考え方 ⇒働かせるための教師の手立てを確立する
- 深い学びへ ⇒各教科・領域における深い学びとは何かを明らかにする
- 人生や社会に生かす ⇒各教科・領域における生かす姿とはどのような姿か

子どもの姿を探る

1. 新研究主題で目指す子どもの姿を考える

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">i) . 問題意識を基に、探究する姿ii) . 各教科等の「見方・考え方」を働かせ、対象を捉える姿iii) . 新たな「見方・考え方」を自覚する姿iv) . 学びを生活や社会とつなげる姿 |
|--|

これらの姿を仮定し、次期研究で目指す子ども像を考察していく。

i) . 問題意識を基に、探究する姿について

“問題意識”とは、「子どもが学習のねらいに向かうために、何を“問題”として捉えて探究していくのか」といった視点から吟味されたものである。それは、教師から一方的に提示されたものではない。“問題”自体に、子どもにとって考えたいような魅力的な要素や、ヴィゴツキーの提唱する“発達の最近接領

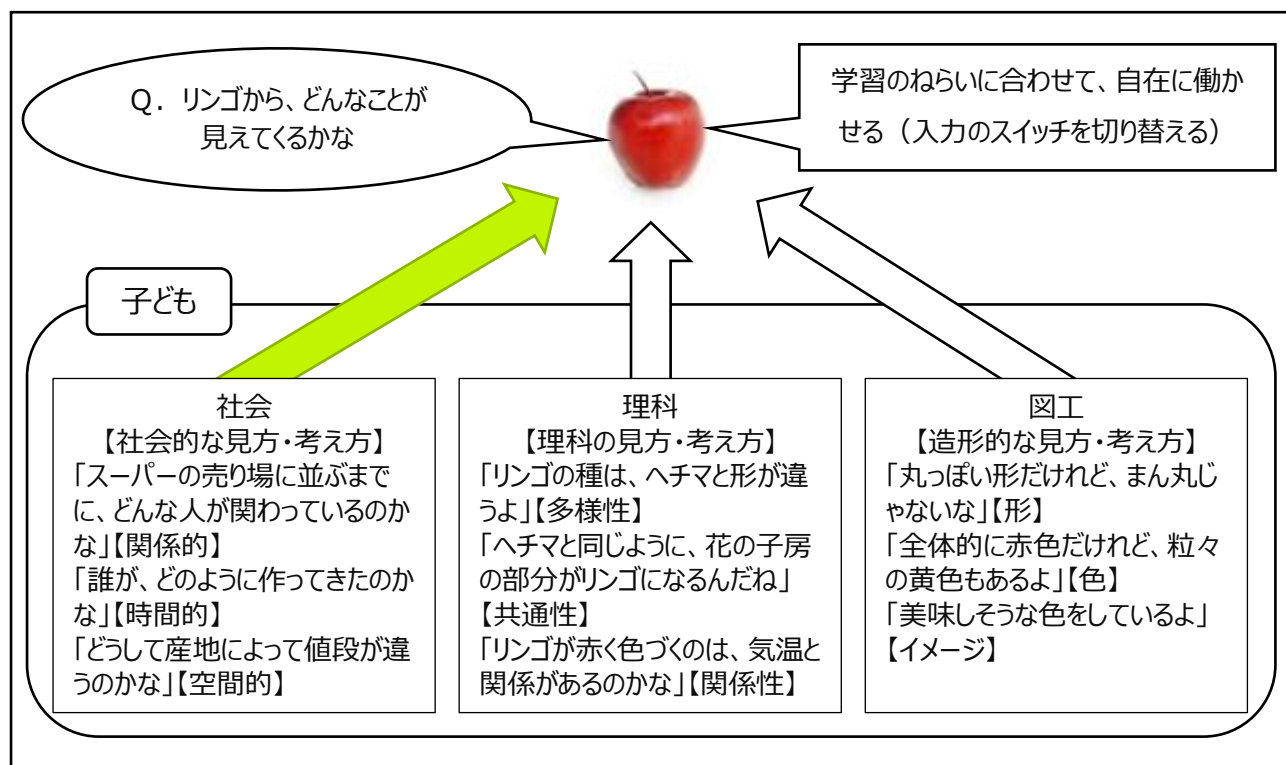
域”を踏まえた適度な抵抗感があることなどで、子どもが解決に向けて主体的に探究する原動力となるものである。

また、「問題解決学習的な学習」の質の向上については、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の視点の中でも示されている。よって、次期研究においても問題解決的な学習を支える子ども一人一人の“問題意識”を前提として研究に取り組む必要がある。子ども一人一人の中に、どう問題意識を生むか、これは教材化において重要な一つの要素である。新研究においても、日々“問題意識”を大切にしながら実践を積み上げたい。

ii) . 各教科等の「見方・考え方」を働かせて、対象を捉える姿について

同じもの（対象）を見ても、どのように入力するかを、子どもが各教科等の学習のねらいに合わせて自在に“入力のスイッチ”を切り替えながら、対象を捉える姿を目指す。

例えば、リンゴを子どもに提示した時に「見方・考え方」によって変わる対象の捉えを以下に示す。



このように、問題の解決に向けてどのような「見方・考え方」を働かせて探究するのかを子ども自身が意図的にできるような姿を目指す。ただし、以下にあるように、子どもが勝手に働かせるわけではなく、働くように教師が「手立てを打つ」ことが重要である。

教科の特質に応じた「見方・考え方」の体得を学問的に極めさせなさい、と言っているわけではないのです。そうでなく、子供がもともと持っている素朴な「見方・考え方」が働くように、教師が意図的に働かせることを通じて、少しずつ鍛えていくという理解のほうが、子供の現実から乖離しないで済みます。

（元文部科学省初等中等教育局視学官 澤井陽介著「授業の見方」より）

iii) . 新たな「見方・考え方」を自覚する姿について

「見方・考え方」の変容は、一単元（一題材・一主題）のみで完結するものではない。学びを通して鍛えられた「見方・考え方」を働かせることで、より「深い学び」に向かう。

各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方である「見方・考え方」は、新しい知識及び技能を既にもっている知識及び技能と結び付けながら社会の中で生きて働くものとして習得したり、思考力、判断力、表現力等を豊かなものとしたり、社会や世界にどのように関わるかの視座を形成したりするために重要なものであり、習得・活用・探究という学びの過程の中で働かせることを通じて、より質の高い深い学びにつなげることが重要である。

（「小学校学習指導要領 総則編 第1章 総説」より）

ここで確認することは、学習のねらいは「見方・考え方」を働かせる（鍛える）ことではなく、資質・能力の育成ということである。つまり、「知識及び技能」の習得、「思考力・判断力・表現力等」の育成、「学びに向かう人間性等」の涵養を目指す際の手段として働かせるものとして捉えることが重要である。

もちろん、学習を重ねることで「見方・考え方」が深まったり、広がったりすることで、より資質・能力の育成が図られると考える。しかし、最も重要な学びの自覚としては、授業を通して子どもが「何ができるようになったか」という視点で捉えることである。

「見方・考え方」は4つ目の資質・能力ではありません。資質・能力を相互に結び付けるイメージです。ですから、どれだけの「見方・考え方」が身についたのかを評価することはありません。このミスリードには、ぜひ気をつけてほしいと思います。

（元文部科学省初等中等教育局視学官 澤井陽介著「授業の見方」より）

子どもが「見方・考え方」を自覚するには教師のかかわりが欠かせない。子どもに単に「気付いたことを教え。」というだけでは視点が定まらず、ただの気付きの交流になってしまう。「着目するポイント」が伝わるように、発問をしたり、資料提示をしたりする。視点をもてるから子どもは思考できる。視点を定める関わりが、「見方・考え方」の自覚化につながるのである。

資料5 資質・能力を結び付ける「見方・考え方」のイメージ



iv) . 学びを生活や社会とつなげる姿

三つの柱の「学びに向かう力、人間性等」の視点からも、学習したことがそこで終わるのではなく、学習したことを基に、自分の生活に生かそうとしたり、生活や社会の中から新たな問題を見出そうとしたりする姿を目指すことが重要であると言える。(資料 1 参照)

これらの三つの柱は、学習の過程を通して相互に関係し合いながら育成されるものであることに留意が必要である。児童は学ぶことに興味を向けて取り組んでいく中で、新しい知識や技能を得て、それらの知識や技能を活用して思考することを通して、知識や技能をより確かなものとして習得するとともに、思考力、判断力、表現力等を養い、新たな学びに向かったり、学びを人生や社会に生かそうとしたりする力を高めていくことができる。

(「小学校学習指導要領 総則編 3 育成を目指す資質・能力」より)

「学びを生活や社会とつなげる姿」について以下のように捉える。

- 「学び」とは、資質・能力を育むために、主体的に問題を解決する学習活動。
- 「生活や社会」とは、学校、家庭、地域等の子どもを取り巻く環境
- 「つなげる姿」とは、学んだことを自分の生活に生かそうとしたり、生活や社会の中に自分なりの意味や価値を創り出そうとしたり、または、生活や社会の中から新たな問題を見出そうとしたりする姿。

2. 新研究主題で目指す授業像を考える

総則で示され、今、求められている子ども像は、まさに「問題解決をしていく子ども」である。私たちが取り組んできた『学びに関わりながら、考えや思いを深めることができる子どもの育成』は、社会の要請にも応えうるものだと言える。

このような時代にあって、学校教育には子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている。

(「小学校学習指導要領 総則編 1 改訂の経緯及び基本方針」より)

このことから、次期研究に向けた授業像を、全く新しい内容を考え、新たな言葉選びをしていくことよりも、引き続き「協働的な学び」を中心に据えた内容の方が、研究を深める上でメリットが大きいと考える。

以上のことから、次期研究の仮研究主題を次のように設定する。

(仮)研究主題

【見方・考え方を働かせ、探究する子どもの育成】

本研究における『探究する力』を以下の4つに定義する。

自己学習能力

自分で調べることができる能力。興味を持ったことや知りたいことを自分で調べ、情報を整理し、**自己判断**できる能力。

問題解決能力

問題を発見し、**自ら**解決するための方法を考え出す能力。**自分で**課題を設定し、課題に対するアプローチを見つけ、実践する能力。

創造的思考力

新しいアイデアを生み出し、**自分で**考える能力。**自分なりの**発想やアプローチを持ち、創意工夫をする能力。

批判的思考力

情報を見極め、**自分で**考える力。情報を批判的に評価し、**自分なりの**判断を下す能力。

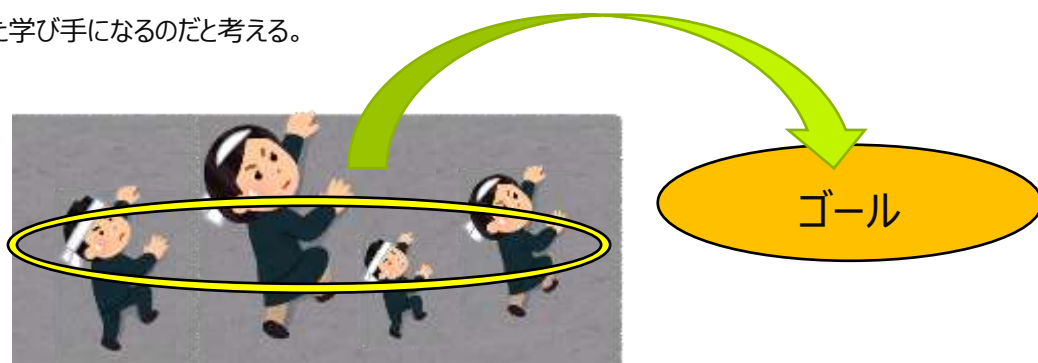
協働的な学び

上記4つの力は、どれも個で発揮される能力である。一見すると、協働的な学びとは、結びつかないように感じられるが、そうではない。熊本大学大学院教育学研究科・教育学部准教授である苫野一徳氏は、『ゆるやかな協働性に支えられた個の学び』と説いて、こう語っている。

「学習科学の研究では、基本的に一斉カリキュラム一斉授業だと、子供たちはせいぜい半分ぐらいの時間しか学んでいないといわれています。一中略—でもそれが自分の時間割や自分のペース、自分のレベルが尊重されれば、もっと短時間で、もっと深く学んで行くことが出来る。しかもその際に、**ちゃんと友達や先生の的確なフィードバックがある**という、ここがポイントです。」

また、福岡教育大学教育学部国語教育ユニット・教授である河野智文氏は、『『自分の言葉で』と、学習者に求めることがある。一中略—相手があり、伝えようとする目的が生じてはじめて言葉は発せられることになる。『自分の言葉』を駆動するのは他者であり、協働の場こそが、個別の言葉の行き交いをもたらすということになる。自己の内面に深く沈んでいく思考の言葉もあるが、言葉を豊かにし、その中に**個別性が見いだされるのは、協働性に支えられてこそ**、ということになる。」と語っている。つまり、他者との『協働的な学び』が、個人の『探究する力』の成長を支えているのである。

子どもは、問題という壁を様々な方法で乗り越える。壁を越える際に誰しも通るフープのような物が、見方・考え方というイメージで捉えるとよいだろう。そして乗り越えた先のゴールが着地“点”であったものが、協働的な学びによって、着地“面”になり、学びの視野が広がる。そのような学びを繰り返すことで、社会で生きて働く力が身に付き、自立した学び手になるのだと考える。



研究の視点 1 教材化に関わって

視点 1 は、主に単元構成・教材化に関わっての内容である。やはり、探究的な学習を考える際に「教材化の視点」は欠かせない。学習指導要領を踏まえると「教材化」をしっかりとできなければ、子どもの資質・能力を育むことは不可能である。

学習指導要領等が、学校、家庭、地域の関係者が幅広く共有し活用できる「学びの地図」としての役割を果たすことができるよう、次の 6 点にわたってその枠組みを改善するとともに、各学校において教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の実現を目指すことなどが求められた。

- ① 「何ができるようになるか」（育成を目指す資質・能力）
 - ② 「何を学ぶか」（教科等を学ぶ意義と、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成）
 - ③ 「どのように学ぶか」（各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実）
 - ④ 「子供一人一人の発達をどのように支援するか」（子供の発達を踏まえた指導）
 - ⑤ 「何が身に付いたか」（学習評価の充実）
 - ⑥ 「実施するために何が必要か」（学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策）
- （小学校学習指導要領 総則編 第 1 章 総説より）

②「何を学ぶか」～教材化に関わる部分

③「どのように学ぶか」～単元構成に関わる部分

この二つは、視点 1 に関わるところである。教材化とは、学習のための要素（素材）を組み合わせたり、切り取ったりして、学習する価値のある教材に仕立て上げることであり、教師の大切な役割の一つである。

教材化は、よく料理に例えられる。学習のための要素（素材）は食材、教材化は料理、教師はシェフ。子どもが主体者となる学びにするには、「食材のよさがあり、腕のいいシェフがいて、適切な料理方法で調理する」ことが重要である。しかし、それが独り善がりの料理であっては、客に喜ばれることはない。客のニーズに合った料理を作ること、客に食材の新たな味わい方を提案すること、など、常に相手意識が大切である。そして、「出来たて、熱々を食べさせたい」。これは山形大学准教授 森田智幸氏の言葉である。シェフによる料理の説明（つかむ・見通す）はいらない。食べて（活動）味わう（思考）、さらにその感想を伝え合う（共有する）ことで、学びは深まっていくのである。

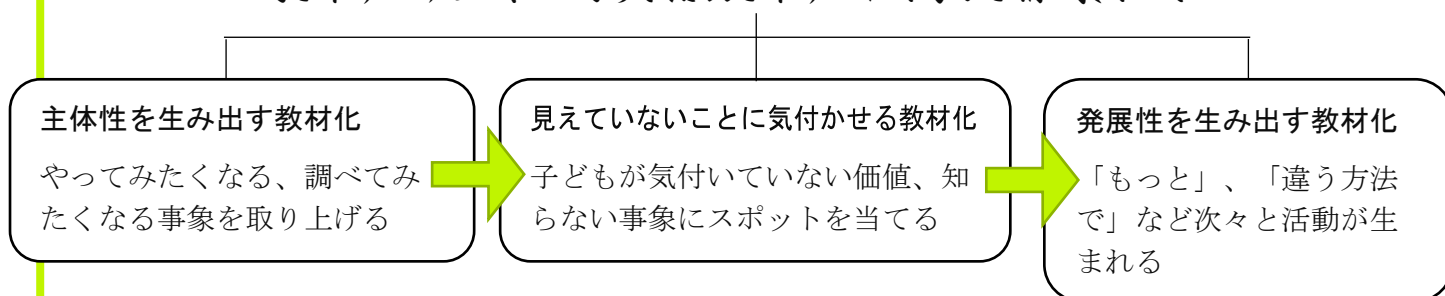
そうした意味で考えると、我々が行う教材化も、子どもの実態を把握することが欠かせない。子どもはどのようなことに興味や関心を示すのか、子どもが気付いている価値はどのようなことなのか、まだ気付いていない価値はあるのか、など、教材化に当たっては、「子ども理解」が重要となる。

教師が教材化したいことが、子どもとどう繋がり、子どもの資質・能力の育成にどのような好影響があるのかを分析する必要がある。

そこで、自問自答する。

- その教材化は正しい（事実と異なっていない）のか
- その教材化は学習指導要領を逸脱してはいないのか
- その教材化は独り善がりなもの（教師の自己満足）になってはいないのか
- その教材化は子どもの資質・能力を育むものになっているのか

何を取り上げるか、どのような活動を取り入れて学びを構成していくか



入力を鍛え、見方・考え方を広げていく教材化を図る。

単元の初めに子どもの主体性を生み出し、単元を進めるにつれ見方・考え方を広げていき、終末には発展性が生まれる。そのような教材化を全ての教科で図ることで、全ての実践が子どもの資質・能力を育むものとなると考える。

②の「何を学ぶか」については、新たな教材開発の手法もあれば、既にある教材の切り取り方・スポットの当て方を工夫する手法もある。それこそが、授業を作る教師の腕の見せどころである。

また、対象をどう見るか。そのためには、「入力を鍛える」必要がある。一面的にしか対象を見ることができなければ、対象に問題意識をもったり、対象を明らかにしたいと意識を高めたりする可能性は低い。例えば、コップを対象とする。コップという一面的な入力しかできなければ、「ただのコップ」で終わりである。しかし、「機能」、「用途」、「形」、「色」、「デザイン」、「容量」、「材質」など、多面的な入力ができれば、「誰がどのような意図でこのコップを作ったのだろう。」といった問題意識が生まれる。そして、それを明らかにしようと、子どもは自分の見方・考え方を働かせて対象に関わっていくのである。その過程で、これまでの視点や考え方でしか捉えていなかったものに、新たな視点や新たな考え方を加えることができたり、育むべき資質・能力が身に付いたりするだろう。対象を明らかにしようとする学びの過程が個々の変容につながり、さらに、それが生活や社会のつながりに結び付けば、研究主題の実現になる。

以上のことから、視点1を次のように設定する。

(仮) 視点1 入力を鍛え、変容に向かう教材化

研究の視点 2 学習展開に関わって

視点 2 は、主に本時に関わっての内容である。昨季の研究では、子どもが学びの主体者になるためには、自ら問題意識をもつという部分は欠かせないことが明らかとなった。この部分については、引き続き前提として、大切にしていく。

新研究でスポットを当てるところは、「見方・考え方」をフルに働かせる場面を本時に位置付けることである。単元を通して入力を鍛えられてきた子どもが、単元の中盤から終盤にかけて思いや考え、気付き等を出力していくのである。これまでも、私たちが実践してきた研究授業は、本時場面が中盤から終盤にかけてのものがほとんどであった。つまり、これまでも、単元（題材）の学びを大切に、その学びを活用する場面を本時で作っていたと言える。やってきたことを土台として、「見方・考え方」を働かせていく（＝各教科・領域の目標に当たる部分）ことを視点 2 として取り上げるのである。

では、「見方・考え方」をどう働かせていくのか。働かせるためには、「問い方」が大切である。社会的な見方・考え方を働かせるための「問い方」を例に挙げる。

1. 位置や空間的な広がり

→どのように広がっているのだろう

→なぜ、この場所に集まっているのだろう

→地域ごとの気候は、どのような自然条件によって決まるのだろう

2. 時期や時間の経過

→いつ、どのような理由で始まったのだろう

→昔から今までに、どのように変わってきたのだろう

→なぜ、変わらずに続いているのだろう

3. 事象や人々の相互関係

→どのような工夫や努力があるのだろう

→どのようなつながりや関わりがあるのだろう

→なぜ、A と B の協力が必要なのだろう

この「問い方」が、本時の問題意識となる場合もあれば、教師の発問になる場合もあるだろう。いずれにしても、子どもが「見方・考え方」を働かせるために、教師が手立てを打つことが重要なのである。その手立てを講じなければ、「見方・考え方」が働かないまま、思い付きや感想の交流に終始して授業が終わってしまうこともあるだろう。

こうしたことを前提に、本時を考える上で大切にしたいことは以下の3点である。

- I. 本時で働かせる「見方・考え方」は何か
- II. 「見方・考え方」を働かせた結果、育まれる資質・能力は何か
→本時の評価に関わる
- III. 主体的・対話的で深い学びに向かうには、どのような学習展開にすればよいか

IIIに関わって

I 及び II を考慮の上、学習展開を考えた時、キーポイントとなるのは「出力」することである。単元を通して入力を鍛えられてきた子どもが、単元の中盤から終盤にかけて「見方・考え方」を働かせながら、思いや考え、気付き等を出力していく。出力することによって、対象を明らかにしていくのである。出力する際に大切なのは、「こだわりをもつ」ことである。これまでの学びの過程にこだわりをもち、自分の思いや願い・意図にこだわりをもつ。この「こだわり」こそが、対象を明らかにするために必要なものとなり、単元（題材）の終末における自己の変容につながるものとするからである。既習や生活経験を基に、自分の出力に「こだわり」をもつような学習展開を図る。

一例ではあるが、以下は、入力と出力を捉えるイメージである。

入 力	出 力
物事の裏を読む	情報を整理・分析し発信する
行間などの書かれていない部分に目をつける	文章を書いて表現する
様々な立場で考える	討論などコミュニケーションを図る
様々な角度や面を対象を見る	知識や技能を生かして表現する
どちらがいいか選択する基準を考える	根拠をもって、選択・判断する

個々の出力だけでは、個々の学びとなり、対話的な学び、深い学びには至らない。その出力を協働的な学びによって、全体のものにしていく必要がある。

そのためには、個々の思考を紡ぐことが有効な手立てと考える。紡ぐとは、綿・繭から繊維を引き出し、よりをかけて糸にすることであるが、ここでは、個々の思考を束ねながら、全体の思考に深めていくこととする。

授業改善の視点である「主体的・対話的で深い学び」を本時でも意識することで、日常の授業改善につなげていく。

- ・主体的…こだわりをもって出力する
- ・対話的で深い学び…思考を紡ぐ

こうするためには、どのような手立てが有効か、各自で実践を交えて明らかにしていく

以上のことから、視点2を次のように設定する。

（仮）視点2 こだわりをもって出力し、思考を紡ぐ学習展開

教科等	学習指導要領解説における、「生活」、または「社会」の位置付け
総則編	<p>これらの三つの柱は、学習の過程を通して相互に関係し合いながら育成されるものであることに留意が必要である。児童は学ぶことに興味を向けて取り組んでいく中で、新しい知識や技能を得て、それらの知識や技能を活用して思考することを通して、知識や技能をより確かなものとして習得するとともに、思考力、判断力、表現力等を養い、新たな学びに向かったり、<u>学びを人生や社会に生かそうとしたりする力を高めていくことができる。</u></p> <p>(「小学校学習指導要領 総則編 3 育成を目指す資質・能力」より)</p>
国語	<p>言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。</p> <p>(1) <u>日常生活に必要な国語</u>について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。</p> <p>(2) <u>日常生活における人との関わり</u>の中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。</p> <p>(3) 言葉がもつよさを認識するとともに、言語感覚を養い、国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。</p> <p>(「1 教科の目標」より)</p>
社会	<p>社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、グローバル化する国際社会を主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。</p> <p>(1) 地域や我が国の国土の地理的環境、現代社会の仕組みや働き、地域や我が国の歴史や伝統と文化を通して<u>社会生活について理解</u>するとともに、様々な資料や調査活動を通して情報を適切に調べまとめる技能を身に付けるようにする。</p> <p>(2) 社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考えたり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて<u>社会への関わり方を選択・判断</u>したりする力、考えたことや選択・判断したことを適切に表現する力を養う。</p> <p>(3) 社会的事象について、<u>よりよい社会</u>を考え主体的に問題解決しようとする態度を養うとともに、多角的な思考や理解を通して、地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚、我が国の国土と歴史に対する愛情、我が国の将来を担う国民としての自覚、世界の国々の人々と共に生きていくことの大切さについての自覚などを養う。</p> <p>(「1 教科の目標」より)</p>
算数	<p>数学的な見方・考え方を働かせ、数学的活動を通して、数学的に考える資質・能力を次のとおり育成することを目指す。</p> <p>(1) 数量や図形などについての基礎的・基本的な概念や性質などを理解するとともに、<u>日常の事象を数理的に処理する技能</u>を身に付けるようにする。</p> <p>(2) <u>日常の事象を数理的に捉え見通しをもち筋道を立てて考察する力</u>、基礎的・基本的な数量や図形の性質などを見いだし統合的・発展的に考察する力、数学的な表現を用いて事象を簡潔・明瞭・的確に表したり目的に応じて柔軟に表したりする力を養う。</p> <p>(3) 数学的活動の楽しさや数学のよさに気付き、学習を振り返ってよりよく問題解決しようとする態度、<u>算数で学んだことを生活や学習に活用しようとする態度</u>を養う。</p> <p>(「1 教科の目標」より)</p>

理科	<p>児童は、自然の事物・現象に進んで関わり、問題を見だし、見通しをもって追究していく。追究の過程では、自分の学習活動を振り返り、意味付けをしたり、身に付けた資質・能力を自覚したりするとともに、<u>再度自然の事物・現象や日常生活を見直し、学習内容を深く理解したり、新しい問題を見いだしたりする。</u>このような姿には、<u>意欲的に自然の事物・現象に関わろうとする態度、粘り強く問題解決しようとする態度、他者と関わりながら問題解決しようとする態度、学んだことを自然の事物・現象や日常生活に当てはめてみようとする態度</u>などが表れている。小学校理科では、このような態度の育成を目指していくことが大切である</p> <p style="text-align: right;">（「1 教科の目標」より）</p>
生活	<p>具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、<u>自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。</u></p> <p>(1) 活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。</p> <p>(2) 身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、<u>自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようになる。</u></p> <p>(3) 身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、<u>意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う</u></p> <p style="text-align: right;">（「1 教科の目標の構成」より）</p>
音楽	<p>表現及び鑑賞の活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、<u>生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。</u></p> <p>(1) 曲想と音楽の構造などとの関わりについて理解するとともに、<u>表したい音楽表現をするために必要な技能を身に付けるようにする。</u></p> <p>(2) 音楽表現を工夫することや、音楽を味わって聴くことができるようにする。</p> <p>(3) 音楽活動の楽しさを体験することを通して、<u>音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育むとともに、音楽に親しむ態度を養い、豊かな情操を培う</u></p> <p style="text-align: right;">（「1 教科の目標」より）</p>
図工	<p>表現及び鑑賞の活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、<u>生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。</u></p> <p>(1) 対象や事象を捉える造形的な視点について自分の感覚や行為を通して理解するとともに、<u>材料や用具を使い、表し方などを工夫して、創造的につくったり表したりすることができるようにする。</u></p> <p>(2) 造形的なよさや美しさ、表したいこと、表し方などについて考え、<u>創造的に発想や構想をしたり、作品などに対する自分の見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。</u></p> <p>(3) つくりだす喜びを味わうとともに、<u>感性を育み、楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養い、豊かな情操を培う。</u></p> <p style="text-align: right;">（「1 教科の目標」より）</p>
家庭	<p>生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、<u>生活をよりよくしようとする資質・能力を次のとおり育成することを目指す。</u></p> <p>(1) 家族や家庭、衣食住、消費や環境などについて、<u>日常生活に必要な基礎的な理解を図るとともに、それらに係る技能を身に付けるようにする。</u></p> <p>(2) <u>日常生活の中から問題を見出して課題を設定し、様々な解決方法を考え、実践を評価・改善し、考えたことを表現するなど、課題を解決する力を養う。</u></p>

	<p>(3) <u>家庭生活を大切に</u>する心情を育み、<u>家族や地域の人々との関わり</u>を考え、<u>家族の一員として、生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度を養う</u></p> <p>(「1 教科の目標」より)</p>
体育	<p>体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見付け、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。</p> <p>(1) その特性に応じた各種の運動の行い方及び身近な<u>生活における健康・安全について理解</u>するとともに、<u>基本的な動きや技能を身に付ける</u>ようにする。</p> <p>(2) <u>運動や健康についての自己の課題</u>を見付け、その解決に向けて思考し判断するとともに、<u>他者に伝える力を養う</u>。</p> <p>(3) <u>運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上</u>を目指し、<u>楽しく明るい生活を営む態度を養う</u></p> <p>(「1 教科の目標」より)</p>
外国語活動 外国語	<p>(1) 外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする</p> <p>(2) 身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う</p> <p>(3) 外国語を通して、言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う</p> <p>(「1 外国語活動の目標」より)</p> <p>ウ <u>日常生活に関する身近で簡単な事柄について、人前で実物などを見せながら、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて話す</u>ようにする</p> <p>(「第2節 英語 1 目標」より)</p>
特別の教科 道徳	<p>一人一人の児童が道徳的価値を自覚し、自己の生き方についての考えを深め、<u>日常生活や今後出会うであろう様々な場面、状況において、道徳的価値を実現するための適切な行為を主体的に選択し、実践することが</u>できるような内面的資質を意味している。</p> <p>(「3 道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」より)</p>
総合的な 学習の時間	<p>探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。</p> <p>(1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。</p> <p>(2) <u>実社会や実生活の中から問いを見いだし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することが</u>できるようにする。</p> <p>(3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う</p> <p>(「第1 目標」より)</p>

学校教育目標と研究の位置付け

【学校教育目標】

夢に向かって自分らしく輝き、
仲間とともに未来を拓く 琢成 の子ども

【めざす子ども像】

- “かしこい知恵のふもとを築く”琢成の子（好奇心を高め、学びへ向かう「できた！わかった！もっとやってみたい！」）
- “声かけあって未来をめざす”琢成の子（まわりの人々の価値を尊重できる 自分のよさや可能性を見出せる）
- “心と身体を日々きたえる”琢成の子（まわりの人々と協働できる よりよい生き方を切り拓く）

【令和5年度 重点目標】

- ・ 自分の可能性を見いだせる子の育成（自己肯定感 個別最適な学び 適切な振り返り レジリエンス）
- ・ 友だちと協働し、さらなる高みを目指す子の育成（他者の価値を尊重 対話と合意形成 協働的な学び）

「社会で生きて働く力」を身につけさせる！—知識から知恵へ—

【学校経営方針から】

- ・ ふれあいやかかわりを深める
- ・ 自分や他者の良さを実感し、温かな人間関係と自信につなげる
- ・ 教職員と児童が一体となって共感・感動のある学校づくり
- ・ 活動意欲を大切にした教育活動
- ・ 豊かな感性や表現力を育む
- ・ 創意工夫のある実践
- ・ 小中一貫教育の推進
- ・ コロナ禍から学んだことを活かす

（仮）研究主題

見方・考え方を働かせ、探究する子どもの育成

（仮）研究内容 1

入力を鍛え、
変容に向かう教材化

（仮）研究内容 2

こだわりを持って出力し、
思考を紡ぐ学習展開

自分の良さや創造力を活かし
学びへ向かう子ども

主体的に関わっていく
ことができる子ども

少々難しくても
やり遂げる子ども

共に学び、お互いの良さを引き出しながら高め合う子

図画工作科学学習指導案

・MSゴシック18P
・10字分の均等割付

1. 題材名「ヒカリバ」

5年1組 19名

授業者 佐藤 和音

2. 研究主題と、本題材の目標との関わり

数字：1桁全角、2桁半角

LEDライトを使ってプラコップを照らす活動を通して、光と影がつくりだす空間のおもしろさに気付き、表したい思いに合わせて照角やスクリーンの位置、材料の組み合わせなどを工夫して表す学習

3. 研究主題の具体化に向けて

本単元（題材）の目標に対して、研究主題がどのように関わっているのかを述べます。

【視点1】入力を鍛え、変容に向かう教材化

【視点2】こだわりをもって出力し、

思考を紡ぐ学習展開

本題材では、LEDライトとクリヤーカップ、ホワイトボードを使い、すてきな空間を探す活動を通して、材料とLEDライトの距離や角度、スクリーンの位置を考える子どもの姿を目指す。そのために、以下の二つの手だてをとる。

本時では、自分なりのすてきな空間の表し方を追究するとともに、それらの捉えを広げる姿を目指す。そのために、以下の二つの手だてをとる。

一つは、照らす行為への気付きを深めるために、色を一色に絞る。その中で、光の当り方や材料の置き方や、角度など様々な表現ができるようにする。

以下の2点について、研究主題を基に具体化した内容を記述してください。

- ① 子どもが入力を鍛え、変容に向かうための手だて
- ② 子どもがこだわりをもって出力し、思考を紡ぐための手だて

すてきだと感じるのか」といって、LEDライトの当て方と材料の組み合わせる場面を設定する。そうすることで、すてきな形や空間の捉えを広げるとともに、どのように表そうかな。」という問題意識をもつようにする。

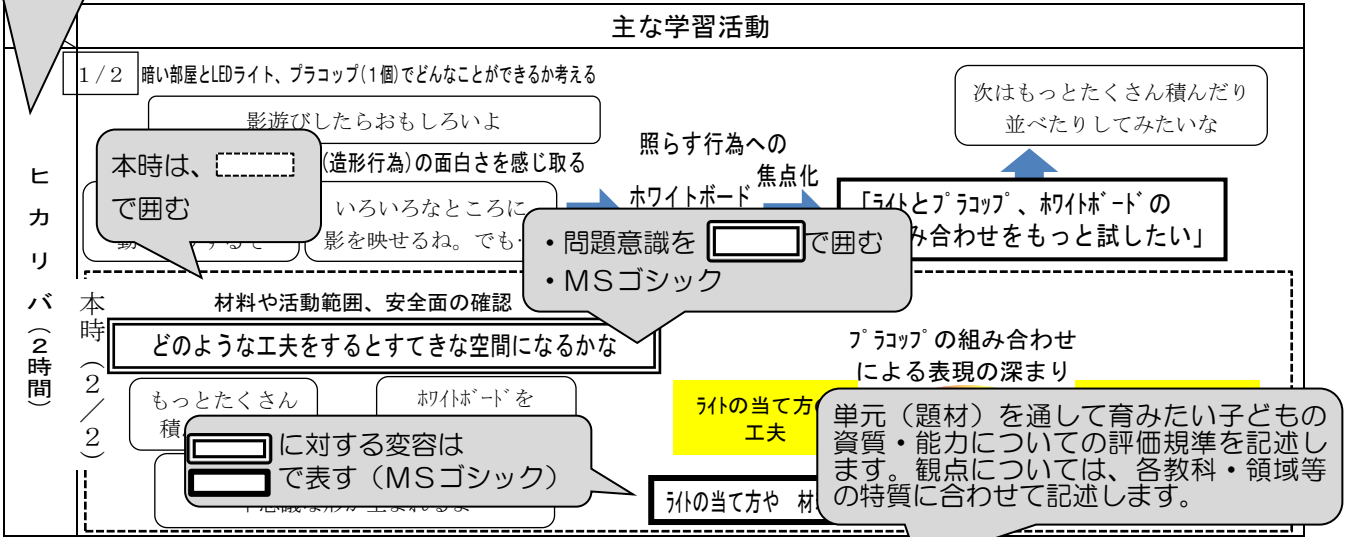
二つは、すてきな空間のイメージを膨らませる題材構成である。そのために、個々に見つけたライトの当て方の工夫や、材料の組み合わせの工夫などを共有できる場の設定を行う。他者と関わることで多様な表現方法に気付き、表したいイメージを膨らませるようになる。

二つは、「すてきな形や空間になっているのか」を感じ取るようにする。そのために、活動している際の工夫を価値付ける。そうすることで、すてきな形や空間に対する見方・感じ方を追究するようにする。

数字：1桁全角、2桁半角

単元（題材）名と時数

（扱い）本時 2 / 2



5. 本題材の評価規準

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等	鑑賞の能力
すてきだと感じるような空間にするために、光と場所の特徴、奥行きやバランスを理解する。	すてきだと感じるような形や空間を思い付き、どのように表すのかを考える。	光と場所の特徴を生かして、すてきな空間をつくりだす喜びを味わう。	自分たちが作りだした空間の造形的なよさや美しさ、表現の意図や特徴などについて、感じ取る。

